

## 「最も不幸な者」はどこにいるのか

イギリスのどこかに、「最も不幸な者」という墓碑銘が刻まれた墓があるという。人々がこれを掘ったところ、屍体の痕跡すらなかった。この墓に埋められた者はどこにいったのか。こんな不気味な出だしで始まる挿話的物語が、『あれか、これか』の中にある。標題は必ず「最も不幸な者」である。

最も不幸な者とは何者なのか？ また何をもって最も不幸であると言っているのか？ どうして墓の中がからっぽだったのか？ そしてなぜ人々は墓を暴こうとしたのか？ 舞台は真夜中の「共に死んだ者たち」の集会の場である。そこで、最も不幸な者を探し出し、その栄誉を与えようとする、世にも奇妙な選挙権が繰り広げられる。この不思議な物語は、埴谷雄高が若き日に読み、後年の『死霊』に深い影響を与えたものだ。

自分は不幸であると思う人々は数多く、時に世界で一番不幸だと思う人々も少なくない。しかし、彼らが不幸だと思う範疇はここでは当てはまらない。たった一言で群衆は消え去る。死を最大の不幸だと思い、死を恐れるがゆえに不幸になった者は、すべて除外されるからだ。死は決して不幸ではない。いや、むしろ死には永遠の安静があるがゆえに、死は生からの解放や救いなのである。それゆえ、最も不幸なのは、死の中に平安を見出せず、死ぬということができない者である。墓がからっぽだったのは、そのことを端的に示している。

キルケゴールは独特の時間論を展開して、不幸な者を次のように定義づける。不幸な者は現在を生きることができない。かといって、希望を通じて未来に生きることもできない。さらにまた、回想を通じて過去に生きることもできない。現在、未来、過去のいずれの時間にも生きることができない者こそ、最も不幸な者なのである。そのため、彼は生きることもできず、かといって死ぬこともできないがゆえに、永遠にこの世を彷徨わなくてはならないのである。

現在を不幸にするのは、確かに運命の一撃である。しかし、人から未来の希望も奪い、過去の回想をも閉ざしてしまうことがあるのは、なぜなのだろうか。それはこういうことだ。人はしばしば、希望すべきものを回想し、回想すべきものを希望してしまう。そのような場合、いくら希望や回想をしてもそこには何も見当たらず、結局その人は不幸になるのである。例えば、幸福な幼年時代を持たなかった人が教師になった場合がそうである。この教師が子供たちの中に幼年時代におけるあらゆる美点を発見して、自分の幼年時代を回顧しようとする。しかし、自分にはそのような幼年時代などどこにも見当たらない。こういう時に、不幸が形成されるのである。

「最も不幸な者」の物語では、不幸な者の類型として、ギリシャ神話から、自分の子供を全員殺され後に岩に化せられたニオベや、オイディプス王と彼の実の母親である妃の娘のアンティゴネなどが紹介される。また聖書からは、義人の苦しみでよく知られたヨブのほか、放蕩息子の父親やユダと思われる人物が登場させられる。しかし、何といても最も不幸な者は、死ぬことがかなわず、この世を永遠に彷徨い続けるあの人物である。物語の中では「永遠のユダヤ人」と示唆されているだけであるが、アハスヴェルスという名前を持つこの人物こそ、キルケゴ

ールの思想全体を解く鍵となる文学的形象なのである。しかし、ここでは、「最も不幸な者」の作品に即して、その驚くべきパラドキシカルな姿を明らかにしてみたいと思う。

## アハスヴェルス—不幸のパラドックス

中世ヨーロッパに生まれた、これもまた不思議な伝説である。アハスヴェルスはエルサレムの靴屋だった。彼は、ゴルゴタの丘に十字架を担いで行くイエスが家の前で休もうとした時に、これを拒否した。イエスは、「それでは私は行くが、お前は永遠にとどまるであろう」と言ったという。アハスヴェルスはそのため死ぬことができなくなり、永遠にこの世を彷徨い続けることになる。彼は後年、イエスの墓の番人となって巡礼者たちの案内人になったとも伝えられる。キルケゴールは、彼を精神の次元でキリスト教に反抗する文学的形象として、絶望を体現した人物だとみなした。実を言えば、キルケゴール自身がそのようなアハスヴェルスの自意識を持っていたのだった。

しかし、「最も不幸な者」の物語は、最後になって意外な展開を見せる。そもそも、なぜ「共に死んだ者たち」は、最も不幸な者を探して栄誉を与えようとするのだろうか。それは、最も不幸な者が彼らにとって最も羨ましい者、すなわち最も幸福な者であるからではないか。死んでしまった者にとっては、どんな姿であれ生きている者こそが最も幸せであろう。永遠のユダヤ人と目される、最も不幸な者への礼賛の演説の中で、そのことが図らずも暴露されてしまう。かくして、「最も不幸な者をほかにして、だれが最も幸福な者であろうか？ 最も幸福な者をほかにして、だれが最も不幸な者であろうか？」という絶叫が、死の世界の静寂に反響する。

キルケゴールは後年、『あれか、これか』などの仮名による美的著作をすべて詩的な排泄であると、自ら切つて捨てるかのような言い方をしているが、しかし書かれた作品はそれ自体として自己主張を行っている。いかなる作品も作者の思いとは独立だと見なすのが作品論的な見方である。それは、「最も不幸な者」の物語を読んでも分かる。この作品では、最も不幸な者は最も幸福な者として断固異議申し立てをしているのである。

キルケゴールは、イスラエル・レビンというユダヤ人秘書を雇っていた。ある時、彼はレビンに向かい、こう語ったという。君はユダヤ人として、キリストに対して自由だから幸福であると言ってよい、と<sup>(1)</sup>。キルケゴールにとってキリスト教の真理は決して揺るがないものであったが、それに生きることが幸福か否かについては、彼はどこまでもその矛盾に悩み続けたのだった。

現在、未来、過去のどこにも居場所がないとすれば、確かにそれは最も不幸なことであろう。だがこれは裏を返すならば、現在、未来、過去のどこにでも行くことができるということだ。それゆえ、これは最も幸福なことではないか。そのことは、まさに人間の精神が自由である証しなのである。不幸と幸福のパラドックスとは、人間が精神であり、そして精神の本質が自由にあるがゆえに起こり得るものなのである。

[註]

ヨハネス・ホーレンバーヤ『セーレン・キルケゴール伝』(大谷長他訳、ミネルヴァ書房、1967年)、54頁。